様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：２８００１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００９５８

研究課題名（和文）薩摩・琉球における境界領域の身分制に関する包括的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study on the Class System of Boundary Areas in Satsuma and Ryukyu

研究代表者
山田　浩世（Yamada, Kousei）

沖縄県立芸術大学・音楽学部・准教授

研究者番号：００６２６０４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、前近代の琉球列島における、『家譜』による身分制度の展開、由緒の選択が、どのように行われていたのか。中世から近代にかけて、また日中両国の支配秩序が重なり合う境界領域であることを踏まえ、検討することを目的とした。
調査では、とりわけ鹿児島および琉球両者の影響を受けた奄美地域の位相を明らかにするため、集中的な調査を実施した。
結果、家譜の整理・分類などから、奄美地域における身分意識の選択・形成は、中世期における出自・経緯をもとに、近世における支配秩序と接続しつつ創出されるものの、時にそれは固定的ではなく、必要に応じ再編・強化を伴い編纂物としての家譜の作成に影響していたことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
家譜を分析対象とした本研究により、①日中の境界領域であった琉球列島において身分は、中世以来の由緒をもとにしつつ、受容する支配秩序にあわせて選択的に創出されること。②創出後もかかる時代の状況や個人の要請にあわせ、再度の編成や創出が選択されうることが確認できた。
選択的な身分およびそれに根ざす身分意識の獲得は、国家間の緩衝地帯であり境界領域である琉球列島の身分制を特徴づけており、人びとのアイデンティティーは、ゆれ動きながら、ふさわしいと思う形に変容、追加され、時にそれは支配秩序間を選択的に行き来させる可能性を持つところに特徴を見いだせることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：In this study, we investigated the status system in the Ryukyu Islands in the pre-modern period. In particular, we examined how the development and selection of status was conducted. This examination was based on the fact that the Ryukyu Islands are a border region where the ruling orders of both China and Japan overlapped.
The research was conducted intensively to clarify the phases of the Kagoshima and Ryukyuan-influenced Amami areas in particular.
As a result, the status in the Amami region was created based on the family origins in the medieval period and influenced by the ruling orders of Ryukyu and Kagoshima in the early modern period. It became clear that the family history was not fixed, but was restructured and strengthened as needed, and influenced the compilation of family histories.

研究分野：琉球史

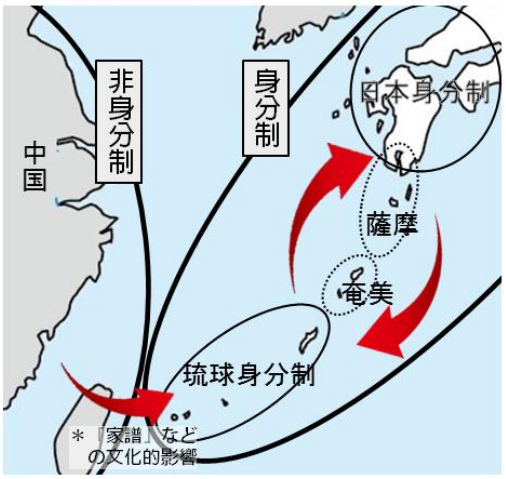
キーワード：身分制　琉球　奄美　境界領域　家譜　鹿児島

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

近世琉球は、これまでの研究によって日本・中国という二つの大国に影響されながら、独自の体制・制度を形成し、近世東アジアの主要なプレイヤーの一つとして存続してきたことが明らかにされてきた。この琉球社会を内部において支えていた主要な制度の一つが、士・農という二つの身分からなる身分制度であった。琉球の身分制度の最大の特徴は、17 世紀末の系図座の設置とそれによる「家譜」編纂、また公的な管理の開始を契機としており、家譜を所持するか否かに基づく厳格な制度として展開した点が指摘されてきた。



東アジアにおける身分制概念図

研究代表者はこれまでに、琉球の身分制が『家譜』の所有／非所有による明確な腑分けを行う強固な制度的特徴を持つ一方、技術者や職能者など、本来は士身分ではなかった人びとが、その必要性から士身分を許可されていくという、柔軟な身分移動があったこと、それは日本で見られた郷士格や名字・帯刀の許可といった一部士族の身分表象を付与するような限定的な形とは異なる、完全な士身分への変更であったことなどを明らかにしてきた。

このように日本とは異なる家譜による身分制度を展開した琉球を前提に、日中の支配秩序がぶつかる領域（＝境界領域）である琉球列島では、どのような身分秩序・運用・表象がなされていたのか。境界領域における身分制のありようや地域間における相違、相互の影響関係の解明は、近世東アジアの社会制度像の空白を埋めるための重要な課題となっている。

２．研究の目的

本研究では、大きくは日本や琉球の近世社会の特徴として指摘されてきた身分制の問題について、時間的には近世に前後する中世や近代へとどのように連続／非連続していたのか。また、地域毎の身分制度の展開や相互の影響関係は、琉球列島という日本と中国という二つの支配秩序がぶつかりあう境界的な領域においてどのように発現していたのかを明らかにすることを目指した。

とりわけ、各地域では、形式的には異なりながらも共通して家譜が編纂されており、自らの系統関係や由緒を示すものとして重視されている。というのも、各地域では、身分の裏付けが『家譜』を通じて行われており、その中では、中世の記録（記憶）が取捨選択され、時に有意な支配秩序に影響されながら別の物語への読み替えをともないながら展開していたからである。すなわち、本研究の最大の目的は、せめぎ合う秩序のなかでいかなる選択をもって『家譜』という身分を証明する文書が編纂・運用されていたのか、その時間的・空間的位相を明らかにしようとするものであった。

３．研究の方法

研究を進めるにあたって、これまで琉球における記憶・系譜の選択・編成過程を取り扱ってきた山田（研究代表者）と、奄美および鹿児島での問題を取り扱ってきた高江洲・畑山（研究分担者）が相互に協力し、①琉球で作成された『家譜』（唐系格）、②奄美群島の郷士となった家々が作成した『家譜』（和系格・唐系格）、③島津家およびその家臣団、郷士が作成した『家譜』（和系格）について合同調査を実施し、検討を深めていくこととした。

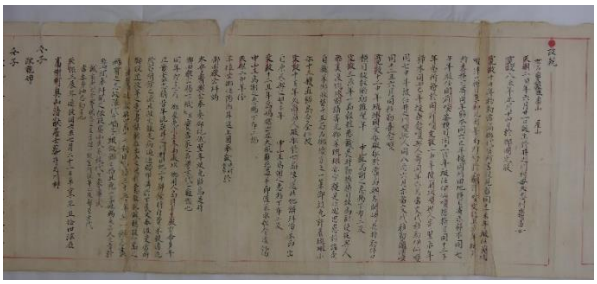
当初計画では、山田が各地域の家譜の悉皆的な調査を実施するとともに、畑山が中世から近世へといたる過程で、島津家家臣団がどのように自らの来歴を表出し記録化（家譜作成）していったのか、高江洲は近代への移行にあって近世的な身分がどのように解体または再生産されていったのかという問題に取り組むこととしていた。初年度には、当初計画に合わせて沖縄・奄美諸島内の徳之島・東京での合同調査を実施し一定の資料を収集したが、全国的な新型コロナウイルスの流行によって引き続いての調査が頓挫し、２～３年度は基本的に初年度に収集した資料の分析や比較をオンライン会議などによって検討を深めることとなった。また、悉皆的な史料調査を変更し、明らかになりつつあった境界領域としての特性が顕著に見られる奄美諸島の家譜を集中的に分析することとした。研究の４～５年度では、徳之島や奄美大島における調査を実施し、家譜編纂の特徴とそこに見られる形式の比較や由緒における記憶の選択、再解釈の過程を合同で分析した。

４．研究成果

奄美系家譜の集中的な調査を通して、奄美における家譜編纂の多様な状況が確認されるとと

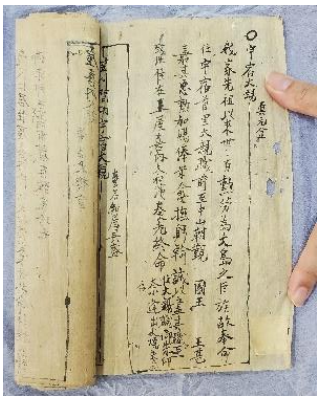
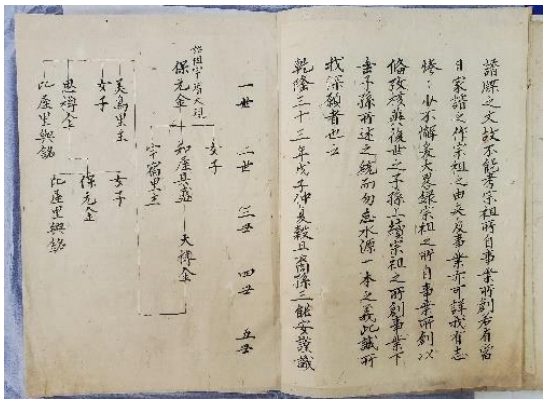
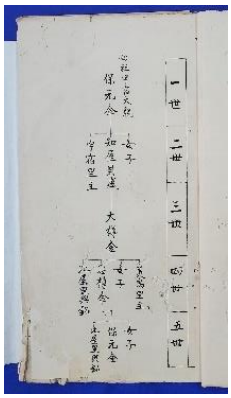
もに、琉球や鹿児島（日本）における家譜編纂の影響がどのように見られるかについて分析を行った。奄美系家譜における家譜編纂は、特に二つの形式（和系格と唐系格）に基づく形で進められていた。代表的なものとして、徳之島に伝来した「奥山家系図」にみえるような和系格、奄美大島大和村に伝来した「宇宿大親家譜系図」にみえる唐系格である。

薩摩藩の藩吏（横目）として徳之島に赴任した奥山八左衛門の子供を祖とする奥山家伝来の「奥山家系図」は、子孫の政が岡前与人就任時（1803）に作成したもので、一族の官吏としての栄達と鹿児島へ渡った機会を利用して編纂されたものであった。系図の前半は、薩摩藩士であった鹿児島奥山家の家譜を引き継いで記載している。



「奥山家系図」（徳之島町郷土資料館所蔵）

一方で、1609 年の島津氏による琉球侵攻以前に奄美大島へと渡った宇宿大親を祖とする和家は、近世にいたっても大島内の有力な役人層をなす家であった。和家には、伝来するだけで 4 種類の家譜（系図）が残され、和系格の系図（「和家系図」）は 16 世紀後半からの記録を持つ。また、唐系格で編纂された「宇宿大親家譜系図」は、琉球で編纂された世代を中心とする家譜と近似する特徴を持っている。年号も琉球で正統とみなされた「中国年号」を用い、1768 年に編纂されたことが序文に記されている。

「和家系図」「宇宿大親家譜系図」（大和村教育委員会寄託）

異なる編纂方法をもつ二種類の系図は、中世以来の家の記憶（記録）をとりまとめながら、それぞれの家にとって有意とみなす（薩摩または琉球の）編纂秩序を模倣または倣うことで作られていた。これらは、島役人を輩出する家柄としての正統性を高めるために戦略的に選択されていたことが推察された。両者に代表される個別の選択は、上位とみなした編成秩序への接近であり、境界領域にあって権力関係に翻弄されたものと捉えるか、はたまたマージナルな属性を持つ境界人としての主体的な選択と捉えるかは表裏の関係であると言える。2 つの、かつ二重の文化的な中心と周縁の境目（＝境界領域）に位置した奄美では、複数の支配的な秩序が影響を与えており、有意とみなす秩序の選択を自らの由緒に引き付けて行うという現象を確認することができたと言える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 山田浩世・小野百合子	４．巻 1024
２．論文標題 戦後沖縄における資料収集・編纂と近年のデジタルアーカイブの取り組み	５．発行年 2022年
３．雑誌名 歴史学研究	６．最初と最後の頁 28-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山田浩世・前田勇樹	４．巻 114
２．論文標題 第4章　文献史料	５．発行年 2023年
３．雑誌名 沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第114集　中城御殿跡―県営首里城公園　中城御殿跡総括報告書―	６．最初と最後の頁 60-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 髙江州昌哉	４．巻 0
２．論文標題 地域・学校・軍隊	５．発行年 2023年
３．雑誌名 大学で学ぶ沖縄の歴史	６．最初と最後の頁 130-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山田浩世	４．巻 0
２．論文標題 首里王府と士族層	５．発行年 2023年
３．雑誌名 大学で学ぶ沖縄の歴史	６．最初と最後の頁 87-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山田浩世	4．巻 なし
2．論文標題 近世琉球における被葬認識の変化―祖先をどう祀るか	5．発行年 2022年
3．雑誌名 葬墓制からみる近世琉球社会	6．最初と最後の頁 18-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山田浩世	4．巻 6
2．論文標題 琉球における社会危機と復興―19世紀前半の「上からの村落立て直し」と褒賞―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 中塚武監修・鎌谷かおる・佐藤 大介編集『気候変動から読みなおす日本史（6）近世の列島を俯瞰する―南から北へ』	6．最初と最後の頁 15-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 平野哲也・鎌谷かおる・菊池勇夫・高槻泰郎・山田浩世	4．巻 1
2．論文標題 近世史の見方はどう変わるか（変わらないか）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 中塚 武監修、中塚 武・鎌谷かおる・佐野雅規・伊藤啓介・對馬あかね編『気候変動から読みなおす日本史（１）新しい気候観と日本史の新たな可能性』	6．最初と最後の頁 164-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山田浩世	4．巻 90
2．論文標題 琉球史の中の職人と技術	5．発行年 2019年
3．雑誌名 しまたてぃ	6．最初と最後の頁 42-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山田浩世	４．巻 1
２．論文標題 沖縄における歴史編纂事業の成果と課題	５．発行年 2019年
３．雑誌名 琉球沖縄歴史	６．最初と最後の頁 24-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 髙江州昌哉
２．発表標題 沖縄近現代史研究の50年
３．学会等名 琉球沖縄歴史学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 山田浩世
２．発表標題 中城御殿の移転と尚家文書
３．学会等名 琉球沖縄歴史学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 畑山周平
２．発表標題 日向国南部における戦国争乱の展開
３．学会等名 南浦文之と櫛間院龍源寺国際フォーラム（宮崎県串間市による一般向け講演会）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山田浩世
２．発表標題 近世琉球における被葬認識の変化―祖先をどう祀るか
３．学会等名 第43回南島文化市民講座「葬墓制からみる近世琉球社会―祖先と子孫の対話」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山田浩世・城間恒宏
２．発表標題 県教育庁文化財課史料編集班におけるデジタルアーカイブについて
３．学会等名 琉球沖縄歴史学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 高江洲昌哉
２．発表標題 日本兵研究と沖縄戦研究の再架橋を考える
３．学会等名 琉球沖縄歴史学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 畑山周平
２．発表標題 『薩藩旧記雑録』所収史料に関する試論
３．学会等名 岡山藩研究会　第49回全体会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 高江洲昌哉（編者、前田勇樹 、古波藏契、秋山道宏）	４．発行年 2021年
２．出版社 ボーダーインク	５．総ページ数 232
３．書名 つながる沖縄近現代史（高江洲担当部分、「ヤマト化」に翻弄される　沖縄、78頁～89頁）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	高江洲　昌哉 (TAKAESU MASAYA) (10449366)	神奈川大学・国際日本学部・非常勤講師 (32702)	
研究分担者	畑山　周平 (HATAYAM SHUUHEI) (30710503)	東京大学・史料編纂所・助教 (12601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関